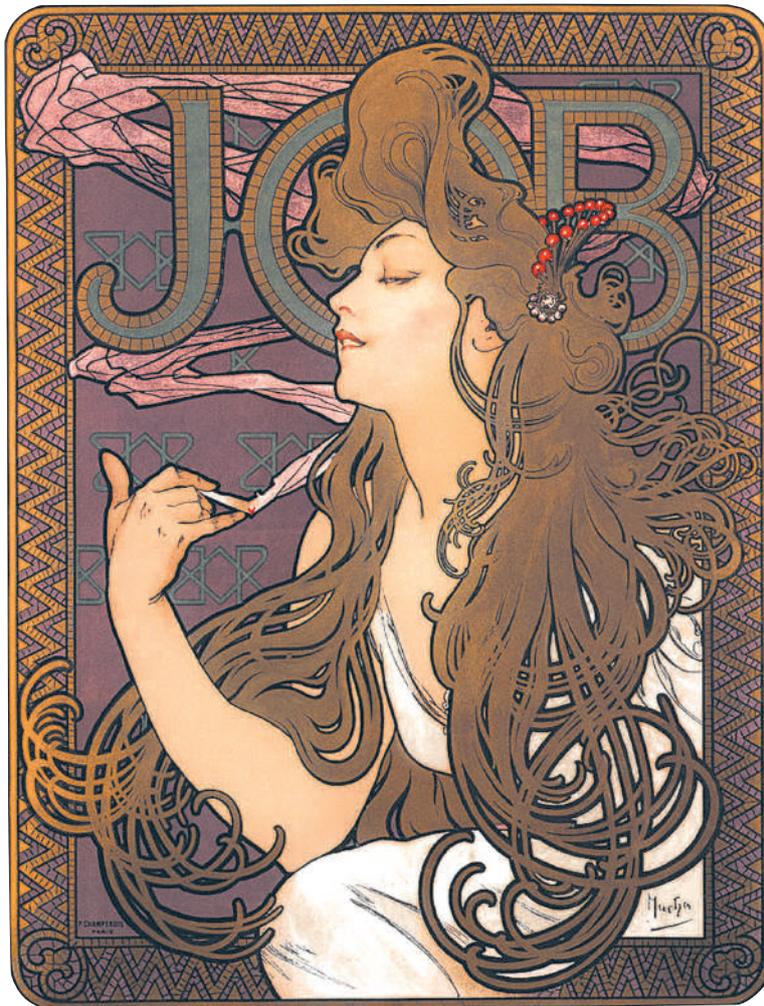


Alphons Mucha Museum News

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館



アルフォンス・ミュシャ
ジョブ (1896年)
1896年
リトグラフ、紙

Contents

vol.3

展示報告 (2013年3月 — 2014年3月)

作品紹介

イベントレポート

作品修復報告

学芸員コラム vol.3

ミュシャ館インフォメーション

ミュシャのデザイン集『装飾資料集』

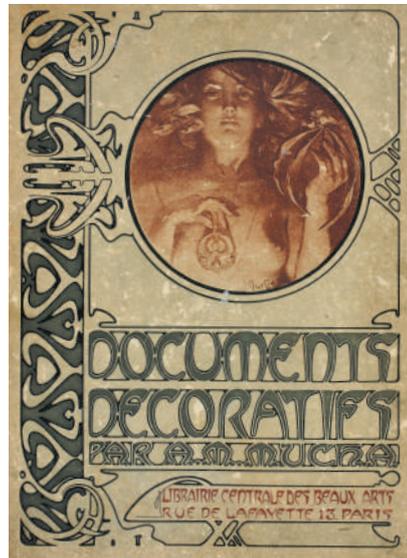
2013年3月16日(土)ー7月7日(日)

『装飾資料集』は、装飾に携わる者、それを学ぶ者のための見本帳として1902年に出版されました。本展は、ミュシャのデザインに関するアイデアを集めたこの図案集を軸に、装飾芸術家としてのミュシャに焦点をあてた展覧会です。本展のみどころは、資料集の図版全72点の一挙公開。書籍での紹介をのぞいて、その実物が全て並ぶ機会は意外にもなかったようです。この珍しい試みとともに、計132点の作品を展示しました。

第1章『装飾資料集』出版前夜』では、ミュシャがパリで装飾芸術家として知られるようになるまでの過程を追いました。当時オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあったモラヴィア地方(現在のチェコ共和国東部)の町に生まれたミュシャは、ウィーン、ミュンヘンを経て1887年頃からパリの美術学校で学び始めます。のちに装飾芸術家として華々しい活躍を見せるミュシャですが、このときはまだ画家としての成功を夢見てパリに出てきた一青年に過ぎませんでした。しかも、パトロンからの援助が学業途中で打ち切られ、30代半ばまでは主に書籍や雑誌の挿絵を描いて暮らしていました。そんなミュシャの人生は、サラ・ベルナル(1844-1923)が主演する演劇「ジスモンダ」のためのポスター制作を機に大きく変化し、以降、挿絵や広告のみならず、室内装飾、舞台美術や宝飾品のデザインなど、様々な仕事に携わっていきます。当時ヨーロッパを席卷していた芸術様式アール・ヌーヴォーの流行を敏感にとらえ、その特徴である動植物の有機的な曲線やS字曲線をバランス良く画面に取り入れた彼の手腕と、大衆の嗜好とがうまく合致したことも、ミュシャの人気を後押ししたと考えられます。会場がアール・ヌーヴォーの様式で埋め尽くされた1900年のパリ万国博覧会においても、ミュシャは複数の国や企業から仕事を依頼され、デザインを提供しました。

第2章「『ミュシャ・デザイン』の開放」では、万博後に出版された『装飾資料集』の内容を、「出版物」「人物のポーズ」「ポスター」「宝飾品、衣装デザイン」「植物、動物」「アトリエ」「室内装飾」の7つのキーワードでまとめ、他のミュシャの仕事や作品とともにご紹介しました。出版にあたり、ミュシャはそれまでに蓄積した知識や経験、興味や理想、想像力を本書の中に集約し、人々に開放します。当時の美術評論家は、装飾家としてのミュシャの才能を次のように評価しています。「彼は、自然の入念な観察と忠実な模写からその特徴を浮かび上げ、それを均衡や調和に配慮し

アルフォンス・ミュシャ
『装飾資料集』
1902年
書籍



ながら装飾の目的に応じた形で表現し直すべを心得ている。」精確に模写した対象を平面的な図へと様式化し、装飾へ応用していくという展開は、例えば植物を描いた図版から見てとれます。当時

流通していた他の図案集や、アール・ヌーヴォーに先行するアーツ・アンド・クラフツの理念を部分的に踏襲しつつも、見る者が利用しやすい図案を選んでいるところは、制作の現場でたたき上げられたミュシャの経験がうかがえるようです。

第3章「夢の実現へ」では、『装飾資料集』の出版後のミュシャの足跡を辿りました。

1900年のパリ万博が流行の頂点だったアール・ヌーヴォーは、その後次第に衰退していきます。過剰な装飾をやめ、機能性を重視していく時代の変化は、装飾家としてのミュシャ人気にも影響したと考えられます。この頃のミュシャは、芸術家としての理想や使命感、スラヴ民族という自身の帰属集団に対する想いを密かに熱くさせていました。『装飾資料集』出版後、ミュシャは商業的な仕事からは徐々に手を引き、芸術を通して祖国へ貢献するという夢の実現に向かっていきます。一時期アメリカへ渡り、室内装飾やポスター制作の依頼を受けたりしましたが、それらには祖国での活動資金集めという目的もありました。1910年に活動拠点をプラハに移してからは、『スラヴ叙事詩』の制作に本格的に取り組み、商業的な仕事は、民族主義的、慈善的な目的で、自身が納得する内容であった場合のみ引き受けていました。この時期のポスターは、パリ時代に比べて画面から過剰な装飾が消え、人物もスラヴ系とわかる容貌で描かれるようになりますが、画面上で安定した構図を実現する構成力は変わりないように感じられます。

商業美術に関わる仕事量はパリ時代が圧倒的に多いとはいえ、ミュシャは生涯にわたって「装飾」という仕事に関わっていたといえます。キャリアのほぼ中間地点で出版された『装飾資料集』からは、今でいう人気デザイナーとしての成功の過程と、人気ゆえの膨大な仕事をこなすためのミュシャなりの方法や工夫が垣間見えます。(H.N.)

ミュシャの横顔

2013年7月13日(土)ー11月10日(日)

日本でも高い知名度を誇るミュシャとその作品の数々。当館にご来館くださる方の中にも、ファンという方は非常に多く見受けられます。ただ、一般的に知られるミュシャ像は、芸術様式アール・ヌーヴォーの流行を背景に成功したポスター作家の一面に偏りがちではなかったでしょうか。本展は、19世紀末パリでの活躍が著しい装飾芸術家としてのミュシャだけでなく、表現の幅を広げようと模索した画家・ミュシャの姿をとらえようと試みた展覧会です。前回の展示とは内容ががらりと変え、活動初期から晩年までの水彩画や油彩画、素描など計70点をご紹介します。堺市が所蔵する油彩画16点が出品されるなど、ミュシャ自身の手による筆使いを

じかにご覧いただける機会ともなりました。

第1章「理想と現実の狭間で」では、画家を目指した若き頃のミュシャが、紆余曲折を経て商業美術や装飾の分野で活躍するようになるまでの道行きを辿りました。幼少期から絵画に興味を持っていたというミュシャは、プラハの美術アカデミー入学が叶わず、舞台装置を描いたり、絵画修復などを任されたりした時期を経て、援助を受けてミュンヘン、パリの美術アカデミーで学ぶ機会を得ます。そこでデッサンや陰影表現の修練に励み、安定した構図や高い写実性を実現する手法を磨きました。アカデミーでは宗教や神話などを主題とした歴史画を絵画の中の最上位に位置づけており、そこで学び、当時のウィーン画壇におけるアカデミズムの代表的画家ハンス・マカルト(1840-1884)に影響を受けたという20代のミュシャは、この時点では歴史画家として大成する将来像を描いていたと思われます。このあと学業半ばで援助が打ち切られてしまいが、

アルフォンス・ミュシャ
スラヴの民族衣装を着た少女:
《スラヴ叙事詩》のための習作
1911年
油彩、カンヴァス



それでもミュシャはパリに留まります。この選択が、やがて女優サラ・ベルナルとの出会いにつながり、装飾芸術家として名を成す大きなチャンスに彼にもたらすことになりました。当時、アカデミーやサロンといった美術制度のもとで活動する画家と、商業美術や装飾を手がける作家の間には明確な線引きがありました。図らずも後者の領域で名前が知られるようになったミュシャでしたが、伝統的な絵画表現を保持しつつ、当時流行していた芸術様式アール・ヌーヴォーの要素も画面に取り入れ、人気と仕事を得意にいきます。

第2章「新たな方向性の模索」では、ミュシャの制作活動と彼のアイデンティティが結び付き、「画家」としての立ち位置を模索していく様子を探りました。1900年のパリ万博でボスニア＝ヘルツェゴヴィナ館の内部装飾を任されたミュシャは、同国に暮らす南スラヴ人の生活や歴史を取材します。ミュシャの故郷はボスニアと同じくオーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあり、独立を目指す民族運動が徐々に高まりをみせていました。パリ時代には民族衣装でポートレートに写るなど、スラヴ民族という意識が強かったミュシャにとって、この取材は刺激的な出来事だったようです。自分は民族のために何ができるのか。その答えをミュシャは大画面の絵画による啓発に見出そうとします。以後、民族主義的テーマで多くの作品を描き、晩年の大作《スラヴ叙事詩》につながる構想を徐々に進めていきます。万博に前後して、ミュシャは油彩画にも本格的に取り組む始めます。小型のものから大型のものまで、物語や歴史、宗教を題材としたものや、装飾パネルと同じモチーフを描いたもの、陰影の強い絵画と平面的な装飾紋様を組み合わせたものなどがみられます。この時期の制作は、画家としての自身の方向性を再考し、将来の目標に向けた試行を兼ねていたと

も考えられるでしょう。

第3章「スラヴ民族を描く」では、晩年のミュシャの活動を追いました。20世紀初頭の数年間にミュシャは数度アメリカへ渡っています。この間に実業家チャールズ・クレインの資金援助を得たミュシャは、1910年にプラハに拠点を移し、《スラヴ叙事詩》に本格的に着手します。制作にあたっては多数の下絵や習作を用意し、構図、明暗、色彩の調整など、綿密な準備と段階を踏んでいました。スラヴ民族を描くというミュシャの情熱は、制作に20年近くをかけた《スラヴ叙事詩》の完成によって完結したわけではありません。市民会館の室内装飾や、1918年に独立を宣言したチェコスロヴァキア共和国の紙幣や切手のデザイン、国民行事のポスターなど、ミュシャは様々な媒体で民族表象に関わっています。皮肉なことに、当時のプラハにおけるミュシャに対する評価は、かならずしも好意的なものではありませんでしたが、彼は自分の信念を持ち続けました。最晩年の彼の思想は民族愛を凌駕し、博愛、人類愛の域に達していた感もあります。

没後、アール・ヌーヴォーの人気作家という以外のミュシャの側面は次第に埋もれていきましたが、近年になって再び彼の多様な活動が明らかにされつつあります。彼の生涯と作品からは、実に様々な「横顔」を見せる画家・ミュシャの姿が浮かび上がってきます。(H.N.)

ミュシャが見たパリ時代を映すポスター

2013年11月16日(土)－2014年3月9日(日)

19世紀末から20世紀初め、ヨーロッパはポスター黄金期を迎えます。特にフランス・パリでは、人や物、あらゆる情報が集中する近代都市の発達によってポスターの需要が高まったこともあり、すぐれた作品が多く生み出されました。

ポスターには、人々の目を惹き付け、効果的に商品や店を宣伝する表現が求められます。画家を目指してチェコからパリにやってきたミュシャは、時代の動きや流行を巧みに取り入れたポスターデザインで人気を博しました。

本展では、ポスターを取り巻く様々な社会状況を踏まえながら、79点の作品を展示しました。

第1章「ポスター黄金期」では、ポスターがなぜ隆盛をみたのか、またその盛り上がりはどのようなものだったのかということについて注目し、作品を通して提示しました。ポスター黄金期には、版画技法の一種であるリトグラフや製紙技術の発展が背景にあります。数々の印刷会社や作家たちがそれぞれの表現に取り組むなか、ポスターを鑑賞物として蒐集するコレクターも現れ始め、芸術的な価値が高まってきました。

第2章「世紀末の光と影」では、ポスターにあらわされた表象から、当時の具体的な様相を垣間見ました。平和で享乐的なパリの19世紀末を指す「ベル・エポック(良き時代)」を体現したのは、ブルジョワジーという新興の富裕層でした。華やかで派手な当時のポスターの多くは、流行や最新の品に敏感だった彼らをターゲットにしています。

しかし一方で、富裕層に雇用される労働者たちの貧困、第一

次世界大戦前夜の不安定な政治状況、現実世界への不満や不安を煽るような世紀末特有の退廃的な空気が、ベル・エポックに対する暗部として存在していました。熱心なオカルティストだったミュシャの作品にも、アール・ヌーヴォー的な美しいデザインとは異なる、不気味で陰鬱な表現が見られます。人間と社会の明暗を内包する混沌の時代にあって、ミュシャ自身のなかにも複雑な想念が形成されていたのかもしれない。

第3章「新しい時代へ」では、ミュシャがパリを離れ始めた20世紀初頭のフランスのポスターを紹介しました。新世紀に入ったヨーロッパは、政治、経済、文化のどの点においても急速に変貌していき、キュビズムなどの革新的な芸術様式も台頭しました。その直線的・幾何学的な造形は、グラフィックやファッションの領域にも影響を与えています。アール・ヌーヴォーとは対照的な、より簡潔で洗練されたこの頃のデザインは、1925年に開催された博覧会の名前を取り、「アール・デコ」と呼ばれました。第一次世界大戦によって旧来の基盤や価値観までもが一掃されたことを背景に、人々の間で過去との明確な決別と新時代への希望が強く意識されていたことがわかります。

誰もが目にすることのできる街頭のポスターは「巷の芸術」と呼ばれ、当時のライフスタイルや流行、文化、思想、価値観などの社会の姿を映し出していました。ポスター黄金期のパリに関していえば、ポスターのある街並み、あるいはポスターそのものが、その時代の象徴だったとも言えるでしょう。(A.O.)



アルフォンス・ミュシャ
ゴーフレット・ラベル:
ルフエヴル＝ユティール
1899年
リトグラフ、紙

ジョブ(1896年)

1896年 リトグラフ、紙 658×460mm



「ジョブ」とはきざみタバコ用巻紙の製造会社、ジョゼフ・バルドゥー社の社名から来る商品名である。ミュシャはこの商品のために2種類のポスターを制作している（もう一方は1898年に制作）。ミュシャ特有の曲線が女性の髪の毛として描かれ、落ち着いた色合いのなかで赤い実のような髪飾りが映える。頭部には大きなロゴ、背後には「JOB」の文字がモノグラムとしてデザインされている。女性の髪の毛やタバコの煙、衣服の一部が、モザイクであらわされた縁の装飾に重なることで、だまし絵的な効果を生んでいる。

販売用に刷られたリカレンダーや絵葉書にも転用されたりと非常に人気が高かった。当時の販売額は3フランで、通常のインクに更に金色を使用して刷ったものは3.5フランで販売されたという。またフランス語だけでなくギリシア語やアラビア語で宣伝文が書かれたヴァージョンもあり、東方諸国での商売の際にもミュシャのポスターが一役買っていたことがうかがえる。(A.O.)

ジスモンダ

1895年 リトグラフ、紙 2179×750mm



ミュシャの名前を広く知らしめ、彼の出世作となった演劇の宣伝ポスター。モザイクを模した装飾を背景に、棕櫚の枝を手にして立つのは女王ジスモンダを演じるサラ・ベルナル。その演技と個性で観客を魅了したこの女優は、欧米の演劇界に多大な影響力を持ち、ロマン派演劇のミューズとして語られていた。

貼り出されるやいなや大評判となったポスターの出来映えもさることながら、彼女とミュシャの出会いやポスター誕生に至った経緯もまた、ミュシャの登場を人々に鮮烈に印象付けた。曰く、「1894年のクリスマス、印刷所に劇場から年始の公演のための急なポスター制作の依頼が舞い込む。しかし、あいにく職人はみな休暇中だったため、当時は挿絵画家のひとりにすぎなかったミュシャに仕事が任された。サラ・ベルナルは彼が大急ぎで仕上げたものを気に入った」と。このエピソードはいわば伝説のようなもので、実際には、ミュシャは1894年秋の「ジスモンダ」初演に足を運んでいたほか、同年11月発行の雑誌のために舞台装置の様子を描いており、内容は劇作家が記した舞台装置の説明と一致していることから、ミュシャがポスター制作以前から舞台に関わっていた可能性が示されている。

いずれにせよ、この後ミュシャはサラ・ベルナルと専属契約を結び、6年間にわたって彼女のためのポスターを手掛けることになり、「大女優のお気に入り」という看板はその後の彼のキャリアに非常に有利に働いたといえる。(H.N.)

クオ・ヴァディス

1904年 油彩、カンヴァス 2375×2185mm

大型の油彩画である本作は、ポーランドの作家ヘンリク・シェンキェヴィチ (1846-1916) による歴史小説『クオ・ヴァディス』から主題が取られ、タイトルは使徒ペテロが発した「主よ、どこへ行かれるのですか(Quo Vadis Domini)」という言葉に由来する。

小説の舞台はネロ帝時代のローマ。青年貴族ウィニクスは属国から来た少女リギアに一目ぼれし、彼女を手に入れようと、ネロの廷臣である叔父ペテロニウスに相談するが、リギアに接するうちに次第に彼女が信仰するキリストの教えに感化されていく。初期キリスト教徒殉教の史実に基づき、その受難と信仰を描いた物語である。

ミュシャが描いたのは、主人公の叔父ペテロニウスとその奴隷エウニク。その四方を花や曲線が複雑に組み合わせられた装飾模様を取り囲む。小説では第1章の終盤、主人に対して密かに身分違いの想いを抱くエウニクが、誰もいない香油室で彼の影像に口づける場面がある。しかし画面に描かれているように、その様子を男性—その装束などから館の主ペテロニウスと考えられる—が目撃するという描写は、小説には見当たらない。本作の内容は、ミュシャが小説に独自の解釈や想像を加えて描いたものではないかと考えられる。

シェンキェヴィチの祖国ポーランドにはスラヴ系の人々が暮らし、大多数がローマ・カトリックを信仰していたが、小説が発表された1896年当時はプロイセン王国の実質的支配下であり、カトリック教徒に対する抑圧が行われていた。古代ローマのキリスト教徒が信仰を貫き、迫害と世の偏見に立ち向かうという原作の内容は、独立を失っていたポーランドの世情を反映したものであった。この物語にミュシャは祖



国チエコの政治的状況を重ねていたのかもしれない。

ミュシャは本作をウィーンの展覧会に出品するつもりだったらしい。その後、作品は彼とともにアメリカに渡り、プラハに拠点を移すときにはタペストリーのデザインに使用されることになっていたという。長らく行方不明となり、1980年にシカゴで発見されたのち1989年に日本で開催されたミュシャ没後50年記念展で公開された。(H.N.)

特別コンサート「延原武春&テレマン・アンサンブル《ミュシャに捧げる音の魅力…》」

2013年6月9日(日) 14:00~15:00

関西各地を巡回した、日本テレマン協会創立五十周年事業「大大阪ターフェル・ムジーク」。そのなかの公演の一つが、堺市立文化館でおこなわれました。テレマンやバッハといった18世紀のバロック音楽を専門とする延原武春氏の指揮のもと、ヴィヴァルディの「四季」やクライスラーの「愛の喜び」などなじみのある楽曲が奏でられました。

会場は超満員! 立ち見のお客様にご不便をおかけすることにもなってしまうほどでした。ミュシャは少年期に教会の聖歌隊に入隊していましたし、晩年にはチェコを代表する音楽家であるスメタナやドヴォルザークに注目していました。音楽への関心は少なからず持ち合わせていたのでしょう。コンサートでは、延原氏のトークや学芸員による解説も交えました。



コンサート後、素敵な音楽の余韻に浸りながらアルフォンソ・ミュシャ館へ足を運んでくださるお客様もいらっしゃったようです。敷居が高いと思われがちなかラシック音楽や美術作品を、気軽に楽しんでいただくきっかけとなったのではないのでしょうか。(A.O.)

ワークショップ「作って楽しむミュシャの世界」

2013年12月21日(土) 14:00~16:00

ミュシャのグラフィック作品をよく見ると、枠・背景・人物・装飾など個々のパーツを組み合わせて構成されていることがわかります。このようなミュシャのデザインの特徴を生かし、作品から取ったパーツのシールを用いてオリジナルカードを作りました。

はじめに、アルフォンソ・ミュシャという画家がどのような人物なのか、また作品にはどのような特徴があるのかといったことをスライドや実際の作品の前に学びます。作業開始後は参加者それぞれが創意工夫を凝らしながら制作に打ち込みました。ミュシャの精緻な描写をハサミで切りぬくことに苦戦した方もいらっしゃいましたが、ワークショップ後のアンケートでは、「楽しかった」「また参加したい」とのご意見をいただきました。



『装飾資料集』に代表されるように、ミュシャは芸術が万人に届くことを目指し、誰もが応用可能なデザインを生み出しました。今回のワークショップでは、そのような「ミュシャ・スタイル」のエッセンスの一端に触れていただけたのではないかと思います。(A.O.)



2013年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
春:四季(1896年)(ほか20点)	—	—	—	作品保存に適した額装への改善(中性紙ハニカムボードへの作品の張込み、グレーシングの交換、ドロアシの装着、裏板の交換)	ConRes工房
モナコ・モンテ・カルロ	1897年	リトグラフ、紙	1093×758	乾式洗浄、裏打ちの除去、裏面の糊の除去、本紙全体水洗、裂けの繕いと折れ部分の補強、裏打ちと作品固定、額・アクリル・パネル新調	山領絵画修復工房
椿姫	1896年	リトグラフ、紙	2080×745	乾式洗浄、裏打ちの除去、裏面の糊の除去、本紙全体水洗、裂けの繕いと折れ部分の補強、裏打ちと作品固定、額・アクリル・パネル新調	山領絵画修復工房
カッサン・フィス印刷所	1896年	リトグラフ、紙	1800×725	乾式洗浄、裏打ちの除去、裏面の糊の除去、本紙全体水洗、本紙洗浄、裂けの繕いと折れ部分の補強、裏打ちと作品固定、額改良	山領絵画修復工房
黄昏	1899年	リトグラフ、紙	608×1025	乾式洗浄、裏打ち除去、裏面の糊の除去、過去の補紙を外して本紙全体水洗、裂けの接合と裏打ち、作品固定、マット改良、額縁の清掃と再装着	山領絵画修復工房

※作品寸法の単位はmm。

『ポスターの巨匠たち (Les Maîtres de l'affiche)』

ミュシャに関する考察を掲載してきました。これまでのコラム。今回は趣向を変えて、ミュシャの作品とともに堺市が所蔵する、ミュシャと同時代の作品のひとつを紹介したい。

印刷会社シエクスから発行された『ポスターの巨匠たち』は、19世紀末から20世紀初頭のポスターから特に人気のあったものを縮刷版で発行したシリーズである。1895年から1900年までの6ヶ月間、購読者の手元には毎月4点ずつ、約39.5×29.5cmの紙に印刷された複製ポスターが届けられた。各プレートの下下には番号が印刷されている。過去のポスターの複製だけでなく、本シリーズのために描き下ろされたリトグラフが付く月もあり、コレクターの収集欲をくすぐる仕組みになっていた。全て集めると、複製ポスター240枚と描き下ろしリトグラフ16枚、計256枚のコレクションとなる。



①



②

- ①ジュール・シェレ
《光のバントマイム(『ポスターの巨匠たち』より)》
1896年
リトグラフ、紙(書籍)
- ②アルフレド・トゥールーズ・ロートレック
《ディヴァン・ジャポネ(『ポスターの巨匠たち』より)》
1895年
リトグラフ、紙(書籍)

い。日・心

本シリーズで選ばれた作家は計97人。なかでもジュール・シェレ(1836-1892)は最多の登場回数を誇る。ポスターデザイナーの先駆的な存在であるシェレは、1866年にパリに自身の印刷工房を開業したのち、1888年以後はシエクス社の支店のようなかたちで印刷工房を経営する一方で、同社の美術責任者

を務めていた。ミュシャのポスターは7枚が含まれている(『ジスモンタ』『サロン・デ・サン第20回展』『ロレンザッチオ』『椿姫』『サマリアの女』『ムーズ川のビー』『シヨブ(1898年)』)。

本シリーズの発行は、ポスターが単なる広告宣伝のための媒体というだけでなく、収集・鑑賞の対象になるほどの人気を集めていたことを物語る一例といえるだろう。19世紀末、大規模な都市改造で中心部が大変貌したパリでは、産業革命とともに消費社会が進み、人々は新しい娯楽や百貨店での買い物を楽しむようになった。社会構造も変化し、それまで一握りの上流階級のものだった文化や芸術がブルジョワと呼ばれる新興階級に開放され、文化や消費活動の中心を担うようになっていく。次々と新しい商品やショービジネスが生まれ、それらを宣伝するための広告が求められるようになる。また、当時ポスターなど商業美術を担う職業的画家と、サロンなどの美術制度のもとで活動する画家との間には線引きがあったなか、アンリ・ド・トゥールーズ・ロートレック(1844-1901)やジュール・ポナール(1807-1947)たちのように、ポスターという媒体に興味を持ち、表現の新しい可能性を見出す芸術家たちも現れた。最初期のポ

スターは挿絵のほとんどないものが多かったが、この頃には印刷技術の進歩により、多色印刷で線描をそのまま写し取ることができるようになっていたこともあり、彼らは競うように大胆な構図や鮮やかな色彩を画面に取り入れた。先に挙げた四人のほか、キャリアの様々な段階にあった画家や版画家、イラストレーター、風刺漫画家たちが本シリーズにも登場する。シェレやグレース、ミュシャやスタンランのように、ポスターという名の新しい媒体によって名声を得る者たちも現れる中で、街を歩き交う人々の視線を集めた数々のポスターは、単なる広告としての枠組みを超え、鑑賞の対象として受け入れられるようになっていったのである。シエクス社による本シリーズは、ポスターに対する人々の熱狂と盛り上げの表れであり、また、そうした傾向を牽引すらしめていたかもしれない。

堺市が所蔵するのはミュシャの『ジスモンタ』『椿姫』を含めた計49枚。とくにミュシャの2点は、縮小されることでより細密な画面に見えるうえ、オリジナルの仕様に近い金や銀のインクが重ねられているため、他より豪華に感じられる。当館の企画展では折にふれて展示されてきたこのシリーズ、会場で見かけられた際には、ぜひじっくりご覧いただきたい。

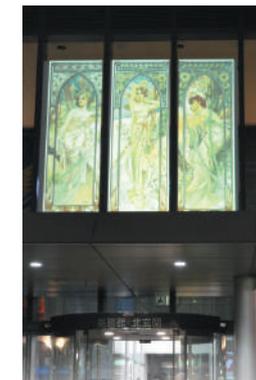
ミュシャ館インフォメーション

大阪くらしの今昔館 「ミュシャくらしを彩るアール・ヌーヴォー」

2013年夏、大阪市北区の「大阪くらしの今昔館」で、「ミュシャくらしを彩るアール・ヌーヴォー」が開催されました。ポスターや装飾パネル、絵葉書、書籍の挿絵といった多様なミュシャ作品のほか、アール・ヌーヴォー期の家具なども展示され、当時の人々のくらしと文化が紹介されました。堺市からは『シヨブ(1896年)』をはじめ37点を出品。7月13日～9月1日の約1カ月半の間、多くのお客様に楽しんでいただくことができたようです。(A.O.)

アルフォンス・ミュシャの作品を市庁舎に投影

堺東で冬の恒例となった、「堺東イルミネーション」。これに合わせ、市の魅力発信を目的とする新たな取組みとして、2013年は堺市庁舎の玄関上部にミュシャ作品29点の映像がプロジェクターで投影されました。12月1日～25日の投影期間、冬の夜に浮かび上がった映像に足を止める方や、写真撮影をする方もいらっしゃったようです。堺市が所蔵するミュシャ作品の魅力や、市民の皆様にご覧いただく機会となったのではないのでしょうか。(A.O.)



堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円
開館時間	9時30分～17時15分(入館は16時30分まで)		
休館日	月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館) 年末年始・展示替期間		
交通	JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分 JR快速にて・大阪から約25分・天王寺から約8分・和歌山から約50分・関西国際空港から約45分		

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ヘルマージュ堺番館
TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833
http://muchasakai-bunshin.com/

